ターミナル期を迎える子どものソーシャルワーク
—日本の絵本における死の描写からの一考察—

中村　明美

A Study of Social Work on the Children under Terminal Care, Considering How Death Is Described in Japanese Picture Books for Children.

Nakamura　Akemi

要約

ターミナル期を迎える子どものソーシャルワークを行う上で我が国の発達過程にある子どもが死をどのように認識していくかを明確にすることは重要なことである。その前段階で、大人は子どもにどのように死を意識づけしているかということを考察・分析する。この分野の研究は、教育学や看護学、心理学分野等から研究はなされているが、未だ不十分であるのが実態である。そこで、本研究は序章として、子どもが大人から死をどのように意識づけされるかを考える目的で子どもの身近な絵本から分析、考察したところ若干の知見を得たので報告する。

今回分析した日本の絵本の死の表現では、幼いもの、小さいもの、弱いもの、女性などが、苦しく、悲しく、悲惨な死に方をすることが多かった。したがって、人間や動物、変化ものに対し、死の描写の役割分担がパターン化されている傾向が明らかとなった。また、人間では性別役割分担が明確に現れる傾向があった。したがって、ターミナルを迎える子どものソーシャルワークを行う時、日本の子どもが、「死」を知る一つの手段として絵本が挙げられるが、絵本の中にはこのような偏りがあることを理解し、援助を行う必要がある。

キーワード：ソーシャルワーク、ターミナル期を迎える子ども、絵本

2002年12月27日受理

はじめに

ターミナル期を迎える子どもの対応は医療専門職だけでは難しく、教育学、心理学、社会福祉学の各専門職か連携をとり協働して、子どもの支援や援助を行う必要がある。

この分野での社会福祉学の責務は制度政策、サービスを整えることにとどまらず、社会福祉固有の援助技術方法であるソーシャルワークを駆使し、いかに子どもとその家族に対する支援や援助を拡大できるかである。

更に、ターミナル期におけるこの分野に関して社会福祉領域から研究する意義は、「児童権利宣言」や「子どもの権利条約」に掲げられている、「子どもの知る権利」と関連して、病名告知や病状告知名などを含むインフォームドコンセントにつながり、今後、我が国の医療と社会福祉においても重要になると考えられる。

本研究対象者は、子どもであること、ターミ

ナル期を迎える病気を持っているという特性から、多様な問題と課題がある。まず本研究の前段階として、ソーシャルワークを行うにあたり、基本的でかつ重要な課題として、我が国の子どもは死をどのように感じ、認識し、受容していくかを研究する。

本論では、その序の段階として、子どもが大人から死をどのように意識づけされるかを 子どもの身近な絵本から考察、分析する。

絵本を題材に選定した理由は、子どもの身近なものである絵本の研究はあまりなされておらず、先行文献がない。特にターミナル期を迎える子どもの多くは、その病気や治療のために生活様式や活動に制限を受けることが多い。その中で、読書や音読はどの状態にある子どもも楽しめる貴重な体験となっている。時には遊びの一部となり、また教育的配慮や発達保障の一部として、子どもは絵本を読むことや、大人から音読される機会が多い。そのことが絵本を選定した理由の1つである。

2つめの理由は、本研究をすすめるにあたって、事前調査として6歳から8歳の子どもに「死」について聞き取り調査を行った。子どもは「現実に体験した死」と「幻想の死（体験し得ない死)」とをわけて話すことが多かった。詳細は本研究では省略するが、「現実に体験した死」について子どもは身近な人やペット、虫などの死を話した。「幻想の死（体験し得ない死)」ではテレビやゲーム、絵本の内容をあげることが多かった。その中でも特に絵本の中の死について話す子どもが非常に多かったという事実がある。

これらの事実をふまえて絵本を分析、考察する題材に選定した。

イギリスやアメリカでは大人が子どもにどのように死を意識づけしているか、自国の子どもがどのように病気や死を認知、理解、受容するかの研究は行われている。我が国でも数多くの翻訳が出版されている。

しかし、我が国においてのそれらの研究はまだ少ない。

近年、我が国でも教育学や看護学、心理学分野等から「死と生」の教育の重要性が説かれ、その実践のため研究はすすんでいる。しかし、ターミナル期を迎える子どもの援助実践まで浸透しているかと言われれば、未だ不十分であるのが実態である。そこで、本研究は子どもが大人から死をどのように意識づけされるかを考える目的で子どもの身近な絵本から調査分析し研究したところ若干の知見を得たので報告する。

方法

京都市内の児童書の所蔵数が多い3箇所の公立図書館または私立児童書専門図書館の児童書中に占める絵本を調査した。

児童書蔵書総数260,114冊のうち、図書館が絵本と示しているもの33,910冊を対象として、日本人著者の絵本から「死」を表す語彙に関する調査分析を行った。

日本人著者のみに限った理由は、我が国の子どもに焦点をあて、死をどのように意識するかを研究するに当たり、死に対する考えの文化的な背景や、その特性を考慮したことがある。また、翻訳本は海外絵本の原作書を入手するのに困難であったことがある。

対象とした33,910冊のうち「死」の表現があったものは131冊であった。うち30冊は、同一図書であったり、出版社や挿し絵作者は違うが、原作者が同一人物であった。そのため、同じストーリーであったので、初版年数から再版数の最多な絵本を一点選び、原作の重複を避けた。その代表的な絵本の題名は『かちかちやま』や『なめとこ山のくま』、『安寿と厨子王』、『羅生門』、『ちいちゃんのかげおくり』などがあった。その結果、各図書館所蔵の30冊が重複し、よって101冊の絵本を分析、考察した。

結果1

絵本の中で死を描写されている登場人物の語彙による分類では、1に人間、2に動物、3に変化ものに分類した。

表1の人間の分類では性別と年令に分けて、高齢の女性、高齢の男性、成人の女性、成人の男性、女の子、男の子の6分類した。登場人物の語彙による分類でわかったことは、高齢の女性と男性の語彙の数が多く、一等親の敬称が多かった。成人の男性では一等親を指す語彙である、父を指す語彙かなかった。また、高齢の男性と男の子では、職業や身分を指す語彙がなかったことがわかった。

すなわち、今回の絵本では、死を描写されている登場人物の語彙による分類では、死を描写されている登場人物の語彙は女性が男性に比べ多くあった。また、高齢者の女性と男性の敬称語彙が多かった。高齢の男性や男の子は身分や職業の語彙では死の描写はないことがわかった。

表1　死を描写されている登場人物（人間）の語彙による分類　その1

	登場人物	一親等の敬称	呼びかけ語など	職業や身分	その他
人間	高齢の女性	ばあさま　おばあさん　あばあちゃん　ばっちゃん　ばば	なし	年老いた乳母	鬼ばばあ
	高齢の男性	じいさま　おじいさん　おじいちゃん　じっちゃん　じいじ	なし	なし	なし
	成人の女性	お母さま　お母さん　まま	おばちゃん	女王様	なし
	成人の男性	なし	おじさん　男の人	殿様　武士　薬売り	なし
	女の子	お姉さん　姉	女の子　若い女　少女	姫	あの子
	男の子	弟	男の子	なし	なし

表2では動物と変化ものを分類した。動物では小動物が子どもなど力の弱い者を指すと心理学では一般に言われているが、本論では小動物と大きい動物と区別せず分析をすすめる。

表2　死を描写されている登場人物（人間以外）の語彙による分類　その2

登場人物	登場人物の語彙
動物	ゾウ　クマ　ライオン　トラ　クジラ　イヌ　キツネ　ネコ　ヘビ　ネズミ　トリ　カニ
変化もの	大男　巨人　雪女　鬼　山姥　やまんじい　ぬし　おろち　龍　妖怪　恐竜

結果2

表3では表1、2に分類した中で、死を描写される登場人物に固有名詞があるか、ないかについて調べた。その結果、高齢の男性、成人の男性と女の子、動物には固有名詞がつけられている場合が多かった。固有名詞がつけられていないのは、高齢の女性、成人の女性と男の子、変化ものであった。高齢の女性と成人の女性、変化ものでは、絵本の主人公であるにもかかわらず、固有名詞をつけられていなかった。

すなわち、固有名詞がないのは女性が多いことがわかった。

表3　死を描写されている登場人物の固有名詞の有無

	高齢の女性	高齢の男性	成人の女性	成人の男性	女の子	男の子	動物	変化もの
固有名詞の有無	なし	あり	なし	あり	あり	なし	あり	なし

結果3

表1、2の分類を元に、死を描写されている登場人物の分類を表4に示した。結果は死を描写されている登場人物の全体像を見ると、人間が53.6%、変化もの29.3%、動物が19.2%となっ

た。各分類別に死を描写されている登場人物を見ると、変化ものが多く、次に、女の子20.2%、動物19.2%、高齢の女性10.1%、成人の女性8.1%、成人の男性7.1%、高齢の男性5.1%、男の子3.0%であった。

すなわち、死を描写されている登場人物の分類は、性別や年令で比較すると子どもが多く、特に女の子が「死」を描写される主体者になる傾向が強いことがわかった。また、成人と高齢者の男女比も、男性より女性の方がその傾向が強かった。

表4　死を描写されている登場人物の分類

	計	高齢の女性	高齢の男性	成人の女性	成人の男性	女の子	男の子	動物	変化もの
死の描写がある	101	10	5	8	7	20	3	19	29
登場人物	100	10.1	5.1	8.1	7.1	20.2	3	19.2	29.3

結果4

表5に死を表現する使用語彙の分類を行い、それに基づき、表6で死を表現する使用語彙からみた登場人物の分類を行った。使用語彙の計が117と死を描写している絵本数と違うが、これは絵本内の死の記述回数を優先させた結果であることをここに述べておく。

死を表現する使用語彙として、女性には「死ぬ」、「亡くなる」、「息絶えた」など直接死を意味する語彙がよく使用されていた。これに対して、男性の使用語彙では、「動かない」や「倒れる」など、登場人物の反応がなくなる状態の語彙と視界から消える状態の死を意味する語彙が使用され、直接「死」を意味する語彙を使用されることは少ないことがわかった。

すなわち、女性に対して死を表現する場合、直接「死」を意味する語彙がよく使用され、また死んでいる描写や死んでいく過程の描写も多かった。特に女の子の場合は多く見られた。反面、男性は登場人物の反応がなくなる状態の語彙と視界から消える状態の死を意味する語彙が使用されることが多く、死んだことが明確にわかりにくい。また、死の描写も少なく、死ぬ過程の描写はなかったことがわかった。

表5　死を表現する使用語彙の分類

死を表現する語彙	動詞	語彙の分類
直接死を意味する語彙	死ぬ	「死んだ」「死んでいきました」「死んでしまった」「死んでいる」等
	亡くなる	「亡くなった」「亡くなったのでした」
	息絶える	「息絶えた」「息をひきとりました」
	殺される	「殺された」「殺してしまいました」
	天国へ行く	「天国へ行きました」「天国へのぼって逝きました」
登場人物の反応がなくなる状態の語彙	動かない	「動かなくなった」「動かなくなりました」
	答えない	「声をかけても答えませんでした」「声をかけても答えてくれませんでした」
	眠る	「ねむるのです」「眠りにつきました」
	倒れる	「倒れた」「倒れました」「たおれていくよ」
	冷たい	「冷たくなってしもうた
	目を閉じる	「目をさますことはなか
登場人物が変化する語彙	かわった	「（姿を）かえた」「（空気の）かわった」
	その他	「解ける」「破裂する」「土になろうとしている」
視界から消える状態の死を意味する語彙	のぼる	「（空へ）のぼっていきました」「のぼっていった」
	いない	「いません」「いませんでした」「いなくなった」「いってしまいました」
	消える	「消える」「（どこかへ）きえました」
	沈む	「しずむ」「沈んでしまった」
	出かける	「（遠い旅にでかける」「でてゆきました」
	その他	「みつからなんだ」「あえない」「飛び込んだ」「身をおどらせた」「溺れる」「おちていく」「なげすててしまた」
登場人物の中に入る状態の語彙	食べる	「くう」「食べてしまった」「飲み込む」

表6　死を表現する使用語彙からみた登場人物の分類

死を表現する語彙	動詞	計	高齢の女性	高齢の男性	成人の女性	成人の男性	女の子	男の子	動物	変化もの
計		117	11	9	10	7	21	3	26	30
直接死を意味する語彙	死ぬ	41	6	2	4	2	12	0	11	4
	亡くなる	3	0	0	1	0	1	1	0	0
	息絶える	6	2	0	0	0	2	0	1	1
	殺される	9	1	0	1	0	1	0	3	3
	天国へ行く	1	0	0	0	0	0	1	0	0
登場人物の反応がなくなる状態の語彙	動かない	7	0	3	0	0	0	0	3	1
	答えない	4	1	1	0	0	0	0	2	0
	眠る	3	0	1	1	0	0	0	0	1
	倒れる	2	0	0	1	1	0	0	0	0
	冷たい	1	0	0	0	0	1	0	0	0
	目を閉じる	1	0	1	0	0	0	0	0	0
登場人物が変化する語彙	かわった	3	0	0	0	0	0	0	0	3
	その他	4	0	0	0	0	0	0	0	4
視界から消える状態の死を意味する語彙	のぼる	1	0	0	0	0	0	0	1	0
	いない	3	0	1	1	0	0	0	1	0
	消える	4	0	0	0	0	1	1	0	2
	沈む	4	0	0	0	0	1	0	1	2
	出かける	4	0	0	0	0	0	0	2	2
	その他	11	0	0	1	3	2	0	1	4
登場人物の中に入る状態の語彙	食べる	5	1	0	0	1	0	0	0	3

結果5

表7に死を描写されている登場人物の死因を分類した。その結果、全体の死因をみると、「他殺」が多く、次いで「戦争によるもの」、「自然死」、「消える」、「病死」などであった。他殺の大多数は、動物や変化ものが人間に殺される話であった。

人間の死因からみると「戦争による死亡」が一番多く、次いで「病死」、「自然死」、「他殺」、「消える」、「事故死」、「餓死」、「自死」、「死因不明」であった。

死因の男女比では、女性は「病死・餓死」が多く、「自然死」は少なかった。男性では、この反対で「自然死」が多く、「病死・餓死」は少なかった。高齢の女性の死は「病死」の割合が多いのに対して、高齢の男性の死は「自然死」のみであった。成人の女性と男性は「自然死・病死・餓死」は見当たらなかった。特に、女の子の死の描写が多く、死因も多岐にわたっており「戦死、餓死、病死、他殺、事故死、自死、消える」などがあることがわかった。

分析をしている中で、幼い兄弟の場合、姉が弟をかばって先に死亡する古典的な話、父をかばい死亡した娘、男の子をかばう母親の死亡など、女性が男性をかばい死亡する話が多く見られた。一方で、逆の話は今回見当たらなかった。

すなわち、死を描写されている登場人物の死因の分類では、幼いもの、小さいもの、弱いもの、女性などが、苦しく、悲しく、悲惨な死の描写をされることが多いことがわかった。

表7　死を描写されている登場人物の死因による分類

	計	自然死（老衰）	病死	貧困による餓死	事故死	自死（自殺）	他殺	戦争による死亡	食べられ死亡	消える	死因不明
計	101	13	8	3	5	2	29	26	3	10	2
高齢の女性	10	1	5	0	0	0	2	1	0	0	1
高齢の男性	5	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
成人の女性	8	0	0	0	2	0	0	3	0	2	1
成人の男性	7	0	0	0	1	1	1	3	0	1	0
女の子	20	0	2	3	1	1	2	10	0	1	0
男の子	3	0	1	0	0	0	0	2	0	0	0
動物	19	6	0	0	0	0	4	7	0	2	0
変化もの	29	1	0	0	1	0	20	0	3	4	0

考察

本研究は序章として、子どもが大人から死をどのように意識づけされるかを考える目的で子どもの身近な絵本の文献検索調査を実施し、絵本に描写されている「死」の語彙などを分析し実態を把握したものである。

その結果、今回の絵本では死を描写されている登場人物は女性の方が男性より多かった。例として、『うば捨て山』の絵本から見ると、絵本の内容は息子が自分の年老いた母を山に捨てにいく話である。我が国での原著は『宇治拾遺物語　打聞集全註解』であり、鎌倉時代に遺棄母と説話され語られている。しかしその原典はインドの仏教説話『棄老国』である。『棄老国』は、父が遺棄される説話であり、仏教法話として、シルクロードを通り我が国に伝わったとされる。遺棄されていた父はインドから中国までであり、日本に入り遺棄されたのは母になった。現在、変更された理由を記述するものはない。この例からみても、女性が男性より死の描写が多いのは、我が国の文化や歴史的背景にも大きく起因していることがうかがわれる。

死を描写されている登場人物の語彙の分類では、高齢者の男女とも敬称の語彙が多く、成人の男性には「父」という敬称はなく、職業や身分での語彙が多かった。一方、固有名詞がある割合は男性のほうが高かった。

これは現代社会での成人の男性の家庭への関与度の低さをあらわすのと重なっていると考える。また、我が国における近代家族像の「女性は家庭で専業主婦、男性は仕事で職業人」という性別役割分担の意識が、絵本の中の死の表現でも、表わされる傾向が明らかとなった。

女性に対して死を表現する場合、直接「死」を意味する語彙がよく使用され、また死んでいる描写や死んでいく過程の描写も多かった。特に女の子の場合は多く見られた。反面、男性は死んだことが明確に語彙にでず、死の描写も少なく、死ぬ過程の描写はなかったことがわかった。さらに、死を描写されている登場人物の死因の分類では、幼いもの、小さいもの、弱いもの、女性などが、苦しく、悲しく、悲惨な死の描写をされることが多いことがわかった。また、力の強い成人の男性が「動物」や「変化もの」を殺すなどのように、死の描写に役割分担がパターン化されている傾向が明らかとなった。

これは社会的・文化的に規定された性差があり、それによって男性は「強者」で女性は「弱者」という力関係が、我が国の社会に構造的に組み込まれていることが反映されているものと推測される。

したがって、絵本の中の死の描写には、以上の偏りがあることがうかがわれた。大人が子どもに無意識に意識づけている死の描写には、子どもに無用な恐怖感を与えているかもしれないということを知り、子どもが個別に持っている死のイメージを早期に掴み、個別の死のイメージや認識に配慮したターミナル期のソーシャルワークの援助を展開する必要性があることを示唆した。

今回の研究だけでは、子どもが大人から死をどのように意識づけされるかの要因を明らかにすることは困難であり、今後の課題として引き続き追究したい。

参考文献

1　Jean Piaget, *The Child's Conception of the World* 1973

2　佐藤比登美「現代の子どもの死の意識に関する研究」『小児保健研究』1999.7

3　今西祐行「子供の向うにある『死』」『国文学解釈と鑑賞』至文堂1998.4

4　上薗恒太郎「子どもの死の意識と経験」『長崎大学教育学部教育学研究報告』1996.6

5　本郷輝明「入院中の小児かん患児に対するQOL測定とその解析」『小児かん』第34巻2号1997

6　森泰二郎　花田良二他「小児白血病、悪性腫瘍患者の

QOLに関するアンケート調査-1病名告知、学校生活について－」『小児がん』第33巻4号1996
7　森泰二郎　花田良二他「小児白血病、悪性腫瘍患者のQOLに関するアンケート調査-2現在の健康状態、将来の不安について－」『小児がん』第33巻4号1996
8　かんの子ともを守る会編著『子ともとかん』とちのき工房1996
9　マイラ・フルーホンド・ランカー　死と子供たちの研究翻訳『死にゆく子供の世界』日本看護協会1992
10　William M Easson, *The Dying Child-The Management of the Child or Adolescent Who is Dying-* 1981
11　池見酉次郎　永田勝太郎編『日本のターミナル・ケア』誠信書房1992
12　E・キュブラー・ロス　川口正吉翻訳『死ぬ瞬間の子供たち』読売新聞社　1997
13　守屋慶子『子ともとファンタジー　－絵本による子ともの「自己」の発見－』新曜社1995
14　松居友『昔話の死と誕生』大和書房1988
15　アール・A・クロルマン　重兼裕子翻訳　『死ぬってどういうこと？　－子ともに「死」を語るとき』春秋社1999
16　カール・ヘッカー編著『生と死のケアを考える』法蔵館2000

（なかむら　あけみ　本学講師）